

# 源氏物語 — 明石一族の物語(続続) —

高 橋 和 夫

(国語・国文学研究室)

本稿は、明石一族の物語の終結部分の考察である。

明石一族は、源家(光源氏・紫上複合体をかように名付けておく)との拮抗を、姫を紫上へ、養女として差し出すようにと指示する光源氏に従うことによって、次の段階への優越的地位の獲得を模索することになる。すでに述べたように、光源氏程の実力があれば、明石上の実子のままで入内させることは、一族が都の内に復帰しさえすれば不可能なことではない。作品の文面にはそうあからさまに書かれてはいないけれども、内心、源氏も明石一族も、身分違いだというのが口実に過ぎないことは十分知っているはずである。大堰に置いておく、即ち、「かくてのみは便なきこと」なのである。どうしてかというところ、この待遇問題は、一にかかって光源氏の意向一つによって決まることだからである。明石上の実子としても入内可能というのは、光源氏がその気ならば、という前提のもとで言えることなので、紫上に同情する光源氏であれば、明石一族が姫を手放さないのならば見捨てる、という破局が裏に控えているのである。光源氏の意向に添うことが一族の

明日の栄達を保証するのだということを、作者は明石上の意中のこととしてではなく、母尼君が娘を説得するという形で述べることによって、これが一族の判断であるという重みで描く。

尼君、思ひやり深き人にて……「……つひにこの御ためにかかるべからむことをこそ思はめ、……」

薄 雲

こう一族が決心した以上、その先、終局の目標地点を、この時期に光源氏に保証させておく必要がある。取られ放しでは元も子もない。それが、雪の日の子別れの折の贈答歌である。

末遠き二葉の松にひき別れいつか木高き蔭を見るべき

えも言ひやらずいみじう泣けば、さりや、あな苦し、と思して、生ひそめし根も深ければ武隈の松に小松の千代を並べむ  
のどかにを、と慰め給ふ。

明石上は一族を代表して、私共は姫を一時手放しますが、それも立派に后がねとお育ていただく保証をして下さったからで、それを母としての面目と違ってよろしゅうございますね。と念を押したのである。

光源氏は、同情心を生じてしまったものだから、さらに一步進めて、私共相生の松の中に小松を置いて、それが千代に栄えるのは、私とあなたの縁が深いから大丈夫とまで保証した。武隈の松は陸奥、この明石の小松は播磨。受領の娘に当地で生ませた子でも、古歌が保証しているというのであろう。この返歌には紫上の存在は無視されている。私がさらに一步進めてと書いたのはこの事である。

だとすると、形の上では手放したとはいえ、血縁その他実力面では、明石一族は、娘の後援者として遠慮はいらない。ただし露骨なやり方は出来ない。そこで考えた実行手段は次のような方法であった。大堰には、尽きせず恋しきにも、身の怠りを嘆き添へたり。さこそ言ひしか、尼君もいとど涙もろなれど、かくもてかしづかれ給ふを聞くは嬉しかりけり。何事をか、なかなか訪ひ聞え給はむ。ただ御方の人々に、乳母よりはじめて、世になき色合を思ひいそぎてぞ、贈り聞え給ひける。

都の二条院で、姫がどんなにかすばらしい処遇を受けているかは、明石方の情報ルートで的確に入ってくる。その主要人物が乳母つまり宮内卿の娘である。その個所で記述したように、元来この乳母は光源氏が派遣して、そしてみごと姫を連れて戻ったことになるが、遂に明石方はこの乳母を、自分たちの地位向上を託す味方の人物に仕立てた。明石一族の気迫も、明石上の人柄の魅力もある。それに加えて経済力の支援。この本文の「乳母よりはじめて」、「世になき色合を」、「贈り聞え」とあると、合点がゆく。娘を単純に手放したのではない。乳母

を頂点とする侍女クラスの人たちに、贈り物することによって、それが姫自身にわたらなくとも、事実上は、姫の経済的支援は、明石一族抜きでは考えられない関係を作り上げたのであろう。この引用個所は、その初発である。

こういう明石一族の富強を、それとなく語るのが作者紫式部の醒めた目による手法らしく、明石上が六条院の一員として移転した一年目、初音巻の初春には、かように「鬚籠ども、破子<sup>わりこ</sup>など」を同じ邸内ながら、北の殿より姫君に奉っていると書いている。引用すると、

姫君の御方に渡り給へれば、童下仕など、御前の山の小松ひき遊ぶ。若き人々の心地ども、おき所なく見ゆ。北の殿よりわざとがましくし集めたる鬚籠ども、破子など奉れ給へり。えならぬ五葉の枝にうつれる鶯も、思ふ心あらむかし。

年月をまつにひかれて経る人にけふ鶯の初音聞かせよ  
音せぬ里の」と聞え給へるを、げにあはれと思し知る。事忌<sup>こといみ</sup>もえし給はぬ気色なり。「この御返りは、みづから聞え給へ。初音惜しみ給ふべき方にもあらずかし」とて、御硯取りまかなひ、書かせ奉らせ給ふ。いとうつくしげにて、明け暮れ見奉る人だに、飽かず思ひ聞ゆる御有様を、今までおぼつかなき年月の隔たりけるも、罪得がましく心苦しと思す。

ひき別れ年は経れども鶯の巢立ちし松の根を忘れめや  
幼き御心にまかせて、くだくだしくぞある。

姫を手放したその年の暮の、あの贈物の記事は、薄雲巻、源氏年三十

一で、この初音が三十六歳だから、この年まで六年間、毎年贈り続けていたであろう。そしてこの初音には、六条院同居を祝って、新年の贈物を加える。

この引用箇所から、ただ単に明石上の経済力というだけでなく、明石上の母性としての心情が、光源氏にも消し難く刻まれる。後程見るように、源氏は一方ではこのように、「げにあはれと思し知」り、「事忌もえし給は」ない程の情に惹かれ、血縁の母子たることを姫に認知させ、「罪得がましく心苦し」くまで思う。しかし一方では、この子別れの課題には源家と明石家の闘いという側面のあることを忘れてはならなかった。光源氏は、明石上という一女性個人には、高い評価をし、人間として出来の良さを思う。それが明石一族となると、紫上の地位を脅かすという一点で、敵対的にならざるを得ない。この個所は、ふとこの後者を忘れた、祝の場なのである。

そもそも、六条院に同居ということが事実上子別れの意義を半減するものだが、明石方は絶えず、姫君集団に物を贈っているという形で、この養女に出していることを実質的に取戻しつつある。蜚巻でもそうである。

長雨例の年よりもいたくして、晴るる方なくつれづれなれば、御方々、絵物語などのすさびにて、明かし暮らし給ふ。明石の御方は、さやうのことをもよしありてしなし給ひて、姫君の御方に奉り給ふ。

例の有名な物語論の冒頭で、これを以下のような角度で読み取るのは

邪道かもしれないが、興味はある。明石の御方は、絵物語が六条院の趣味だと知ると、すかさず、絵物語を制作して姫君に届けたのである。物語の写本だけならばともかく、絵までとなると、かなりコスト・手間がかかろう。「姫君の御方に奉り給ふ」とあるのは、明石上もほかの女性たちと等しく、絵物語が好きだったというだけではなからう。梅枝巻で、姫君入内の豪華な調度品一覧が見られるが、そうでない内々の姫君の教育面にも明石上は関わっていると考えられる。このすぐ後、「紫上も、姫君の御あつらへにことつけて、物語は捨て難く思したり」という所以下に始まる物語論議の資料本は、明石の御方制作の絵物語ではないかとも思われる。六条院の絵物語は、北の殿が工房だったかもしれない。そうしてみると、姫教育の出資者は明石上で、教育者は紫上ということになる。これが姫譲りの本体なのであるうか。

玉鬘十帖は、明石一族の活躍の場ではなかった。明石物語は、姫を養女に送り出して着袴の儀を行って後は、梅枝巻での裳着、十一歳まで、その主役物語ではない。明石上の位置と姫の成長とが、静的に書いているだけである。明石一族の物語の、親子三代のロマンは、梅枝巻で後半に入る。忍従を旨としつつも、誇高く生きる明石一族に、その果実としてどれだけの栄光が待っているか、明石一族の物語はまだ終わっていない。こうしてみると、源氏物語は、藤裏葉巻が光源氏の栄華の頂点を語る大団円の巻で、昔物語は皆めでたしめでたしで終わっているという物語理解は、どうして流布するようになったか知ら

ないが、いわれないことである。源氏物語のような大河小説とでも言うべき物語は、各物語單元について始発と終結があるのであって、藤裏葉巻終結の物語單元は、光源氏の予言物語のそれである。繰り返すようだが、明石一族の物語の終結は匂宮巻である。明石上は、光源氏が生ある限り、これに自分が取り付いて離さない。そして源氏の死後、地の文は勝利宣言めいた記述を遺して終わる。

紫上の養女となっている姫に、実母明石上がどれだけ血縁を恢復するか、それを光源氏がどの程度拒否し、どの程度認容するか、それが以後の経過である。

この論文の初めで推定しておいたように、明石一族の物語は、すでにその初発時において、終結部分までの完結した構想があったと思われる。それを現今の巻序にその具体化の姿で見ると、若紫巻から匂宮巻までであるが、そうした構想の予定図は、執筆時には既に出来上がっていたであろう。そしてその予定図は、これの展開において生涯の節目を持つ人物、明石姫君の生涯歴によって構想の区分・展開があり、その蔭に母明石の上の生涯歴がある、そんな予定図が浮かび上がってくる。これはあたかも、キリストと聖母マリアみたいな、福音書を想い出させる。ただ、その受難が、キリストに当たる明石姫君ではなく、聖母マリアに当たる明石上の身の上に起こっているという類比の上での違いはある。直接に伝承関係のない物語をただ一般的な物語類型として比べてみるだけになるけれども、何らかの激しい願望

を、苦難を克服して実現するというテーマは、聖と俗の違いはあっても共通している。

それでは、明石姫の生涯歴の節目はどうか。簡単な一覧表にする

（若紫巻	前史
明石巻	受胎告知
薄雲巻	生誕
松風巻	養女の苦難
梅枝巻	裳着
藤裏葉巻	入内
（若菜上巻	皇子誕生
幻巻	
匂宮巻	結論

このように整然とした生涯歴となっている。明石一族の物語の主役は、言うまでもなく明石上その人で、光源氏家に対してどれ程の忍従で仕え、一族の榮誉恢復に執着したか、その人間像は鮮明に描かれていることは言うまでもない。これに対して明石姫君は、この一族の中でとうてい主役ではない。担わされた役目がそうだし、また作品中の描写も平板である。しかしそれ故に、この姫君の生涯歴の区切りが、明石一族の榮光への道の里程碑になっている。この全体構図は、

執筆以前に出来上がったであろう。

引き続き、この生涯の後半、梅枝巻の記事を考察してみる。

東宮への入内がすぐ後に続く、明石姫の装着は、姫十一歳の時、袴着の為に実母から引き離されたのが、三歳、この間は八年、紫上は養母としてこの姫の薫育にあたり、それがほほ身についたということになるのである。この装着の儀以下、姫の成長・行事の節目ごとに、明石一族はどのように関わるかが許されたか、またその参加度について、明石一族はどういう感懐を持ったか、これが本稿の主題である。

装着は、秋好中宮を腰結役として、西南の御殿で行われ、その折に紫上は中宮と対面した。（同じ六条院の中でさえ、また歌文の交換はしても、同居以来四年間も面識がなかったとは驚かされる）気になるのは、明石上はどうかというと、源氏の判断としてこの物語は書く。

大臣も、思すさまにをかしき御けはひどもものさし集ひ給へるを、あはひめでたく思さる。母君の、かかる折だに見奉らぬを、いみじと思へりしも心苦しうて、参う上らせやせましと思せど、人の物言ひをつつみて過ぐし給ひつ。

明石上は、子別れ以来、同様に八年間、姫の成長を知らない。この引用文を解釈すると、まず、源氏は、姫の装着に、秋好中宮、紫上、明石姫が、それぞれ「御方々の女房」を控えて参集したのがとても格式高くて満ちた。つまり、明石上が参加しなかったのよかつたと思つてゐるのである。ところが続いて、明石上のことについて「かかる折だに」と書いて待ちに待ったはずの装着なのに、他の折はともか

く、この機会に参加することは、自分が娘を手離れた功績に報いる唯一の方法だということを強調している。それを「いみじと思へりしも」とあるのを、過去形「し」を使っているのは、明石上が源氏に、直接か間接かはともかく、意志表示したことを示して余りある。多分、直接に、装着の事が西北邸で話題になった時、明石上の表情に、どんな形でも参加出来ないことへの不満が、ありありと読みとれたのであろう。源氏はそれを「心苦し」と思う。しかし、それは実現しても単なる参加ではない。「参う上らせやせまし」である。呼んでも、「参上」であり、何等かの一段でも劣った役を割り当てねばならない。源氏は、装着では適当な役を思いつかなかったのではないか。へたすると対等になる。世間の聞えを憚って、参加の声をかけなかったのである。

姫の装着の儀は、六条院のうちうちの事であった。

かくて六条院の御いそぎは、二十余日の程なりけり。対の上、御阿礼に詣うで給ふとて、例の御方々いざなひ聞え給へど、なかなかさしも引き續きて、心やましきを思して、誰も誰もとり給ひて、ことごとしき程にもあらず、御車二十ばかりして、御前などもくなくだしき人数多くもあらず、事そぎたるしもけはひことなり。

この御阿礼詣をはじめ、広く源氏物語を賀茂神の信仰から説かれた小山利彦氏の論<sup>註1</sup>は出色の作であり、またこの論をうけて鈴木宏昌氏は<sup>註2</sup>王権守護の観点から詳述されている。そもそも紫上が源氏によって北山で発見され、ここでまた賀茂詣が記されているのは、紫上を「水

の女」と見るか、<sup>き</sup>「山の女性」と見るか、<sup>き</sup>表現はともかくも、平安京成立の根源的な水利体系をふまえた登場人物だからである。そういう深く沈潜した、<sup>みやこ</sup>京の思想が源氏物語にはあって、それが、養女入内の直前に賀茂詣をして、自分がこの入内によって、皇統の保全実現を祈願する主役たる確認を求めたのである。姫の入内だけなら、何も四月二十余日にする必然性はない。しかし、この姫は、北山の水を浴み賀茂神への祈願によって入内することが必要不可欠ならば、四月中の酉の日〔これはどの年でも含むのなら、四月十三日〜二十四日〕であり、入内の二十余日というのは誠に神妙な日付である。賀茂祭以後ということである。言わずもがなだろうが、明石上の生んだ海神の申し子を、山神（水神）の申し子として変成させるためには、御阿礼詣がぜひ必要であり、祭り以後に入内させるべきである。住吉明神の影響があつてはならない。紫上は御方々をいざなつたという。花散里を含むだろうが、目当ては明石上であることは歴然としている。返事は、おもしろくもないので皆思いとどまつた。と書いてある。明石上を、つまり住吉明神を、賀茂神の支配下に置く意図、それへの拒否と厳しく解釈するか、有和の提案に、忍従と遠慮の回答とるか、研究者の個人差があつてもいい所である。それはともあれ、このわずか五行程の文章は、まことに広い史的意味を持っている。これはこの後、若菜巻の住吉詣との対比の伏線である。

次が、姫君入内の場における、明石上後見役としての登場である。ここの本文はかなり長文なので、全文記述して解説したい所だけれど

も、一部分省略にする。

かくて御参りは北の方添ひ給ふべきを、「常にながながしうはえ添ひ侍ひ給はじ。かかるついでに、かの御後見をや添へまし」と思す。上も、「つひにあるべき事の、かく隔りて過ぐし給ふを、かの人もものしと思ひ歎かるらむ。この御心にも、今はやうやうおぼつかなくあはれに思し知るらむ。方々<sup>かた</sup>心おかれ奉らむもあいなし」と思ひなり給ひて、「この折に添へ奉り給へ。まだいとあえかなる程もうしろめたきに、さぶらふ人とても、若々しきのみこそ多かれ。御乳母たちなども、見及ぶ事の心いたる限りあるを、みづからはえつとも侍はざらむ程、うしろやすかるべく」と聞え給へば、いよく思し寄るかなと思して、……

ここの話題は、丁度先程の装着の場で、明石上を外したことが、源氏・紫上共々に、心のわだかまりになつていたことを示している。ここの「かの御後見」という語がはじめて出て来るのは、たとい心内語であるとは言え、疑問がある。装着の所では、同じ心内語でも「母君」とあつた。紫上の養女として娘を取り上げてしまつて以来、何の役割もしていない彼女を、御後見というのはおかしい。強いてみれば、経済的支援者とみることも出来るが、唐突である。むしろこれは、これ以後の彼女の役割として予定していた語が、うっかり先に出てしまつたものか。ともかく、ここは、「添ふ」という動作を、北の方である紫上も、御後見の明石上も同様にするのが役である。姫君は主役であり、入内者だからである。ここは装着からの繋がりが巧みに出来てい

る。書き出しにまず、源氏の心内語―それは装束の折の心やましきの  
 継続―は、紫上に譲歩して貰って、明石を出してやることにしよう  
 か、とつぶやいていることである。これは「思す」である。次の紫上  
 の心内語は「思ひなり給ひて」である。この方が明石上への抵抗感が  
 強いことを示している。こう思わざるを得なくなったこと、ここにこ  
 の源家対明石家の闘いの、今までの第何戦は、というのではなく、賢  
 明さを働かせて、源家が妥協の手を差し延べねばならなくなったので  
 ある。半ばレフェリー役の光源氏は、内々明石上へのいとおしさが  
 ベースになっているから、すでに初音巻の正月に、姫に実母への歌を  
 返させることをすすめている。しかし紫上にはわだかまりがある。そ  
 れが、自ら、姫を独占することがもう出来ない、しては自分の立  
 場がなくなることと悟ったのである。「つひにあるべき事」と将来を  
 予想している。この論理は、実母は「ものし」と思い嘆くだろう、娘  
 はいよいよ実母恋しさがまさるだろう。二人から自分が嫌われるとい  
 うことである。これは、明石一族の執拗な姫支援、それに答える姫の  
 実母への思慕、そしていよいよ到った姫の一女性としての自覚できる  
 年齢。おそらく姫は、養母紫上への敬愛と実母明石上への恋慕とを  
 はっきり区別して、紫上にも源氏にも接するようになって来たのに違  
 いはない。観方によれば、紫上は、姫を明石一族から切り離すことに失  
 敗したのである。そして源氏に進言する。進言の内容、つまり理屈付  
 けは、ここで解釈するまでもあるまい。

続けて、

……「さなむ」とあなたにも語らひ宣ひければ、いみじくうれしく、  
 思ふことかなひ果つる心地して、人の装束何かの事も、やむごとな  
 き御有様に劣るまじくいそぎ立つ。尼君なむ、なほこの御生ひ先見  
 奉らむの心深かりける。今一度見奉る世もやと、命をさへ執念く<sup>ひ</sup>  
 して念じけるを、いかにしてかは、と思ふも悲し。

この箇所はさほど注目される点はなさそうである。前半、参加を聞か  
 された明石の尼上・母娘のよろこび、物質的支援の一そのの拡大が見  
 てとれる。そして、明石家に有利な話がでると、呼応するかのよう  
 に尼君が出てくるのは、この反応が明石上一人で終わるのではなく、明  
 石一族の浮沈に関わることだというのに等しい。

……その夜は、上添ひて参り給ふに、御輦車にも、立ちくだりうち  
 歩みなど人わるかるべきを、わが為は思ひ憚らず、ただかく磨き奉  
 り給ふ玉の瑕にて、わがかくながらふるを、かつはいみじう心苦し  
 う思ふ。

御参りの儀式……（中略）……三日過ぐしてぞ、上は罷でさせ給  
 ふ。立ち替はりて参り給ふ夜、御対面あり。「かく大人び給ふけぢめ  
 になん、年月の程も知られ侍れば、うとうとしき隔ては残るまじく  
 や」となつかしう宣ひて、物語などし給ふ。これもうち解けぬるは  
 じめなめり。ものなどうち言ひたるけはひなど、むべこそはと、め  
 ざましう見給ふ。また、いと気高う盛りなる御けしきを、かたみに  
 めでたしと見て、そこらの御中にもすぐれたる御心ざしにて、並び  
 なきさまに定まり給ひけるも、いと道理と思ひ知らるるに、かう

まで立ち並び聞ゆる契りおろかなりやは、と思ふものから、出で給ふ儀式のいよそこによそほしく、御輦車などゆるされ給ひて、女御の御有様に異ならぬを、思ひくらぶるに、さすがなる身の程なり。

この引用場を検討してみよう。引用箇所冒頭の「上添ひて」は、女御と紫上は同行する意味での「添ふ」で、既出(六ページ)の「御参りは北の方添ひ」と用途は同じ。ところが明石上の「添へ」(六ページ)はどうも違う用法らしくある。源氏は「御後見をや添へまし」と思っていた。この「後見」がどんな役かは問題があるが、ただ側において、用件があつた時にだけ仕事らしい仕事をする若人型ではなく、蔭で女御に尽くす包括的な仕事をする型とすれば、ここの「添へ」は使役の他動詞であることから、身分的に低いのである。

もう一度前の、源氏に紫上が進言する部分との関わりで読んでみると、源氏が思い、紫上が思いかつ進言したのは、紫上の身代わりにその一部分を時間的に代行するために「添へ」るのではなく、紫上の差配下で、それに助力するために「添へ」るのである。そういう進言だから源氏も賛成したのである。

ところが、おそらく二人にとっては意外に、私共読者にとっては案の定、明石上はこの形式での実行を断つた。姫と養母が輦車で、実母は徒歩で、この形式の具体化イメージは、ここ入内の折に典型的に表われる。私の為ではない、姫の瑕になる、という口実で断つた。

読者はその本当の理由を知っている。譲るべき所は譲れる。しかしこの入内の形式の屈辱のさまは、明石一族の誇りの前にはあつてはなら

ないことである。

その代案はまことにみごとである。初日から三日紫上は勤めて、三日の夜、対面して交代するというのである。これこそが「かうまで立ち並び聞ゆる契り」なのである。そう思える行動ができる。明石一族の覇力である。しかしそれは、目の前で公式に、つまり宮廷秩序として否定される。紫上は単独でも輦車で退出出来る。女御格、つまり娘の姫格、それと比べると我が身は、と宮廷秩序が断定する。

長い距りと、対抗心の持続の果ての、今日の対面。作者はこの二女性の相互評価をどう記述するか、正確を期すために随分苦心していることよ、と読みとれる。まず初めに、紫上は、やはり最初の直観は、今までの対抗心の継続の「めざまし」である。「また」明石上は紫上を「いと気高う盛りなる御気色」の点で見、しかし作者は「かたみにめでたしと見て」と書く。そして明石上は冷静に、紫上は源氏の大勢の愛妾たちの中の一人だったのが、その「すぐれたる心ざし」で、「並びなきさまに定ま」ったのであつて、決して出身・身分で決定的なのではない、と見抜いている。だから自分も「立ち並」ぶことが出来るのである。

四日目からは明石上が紫上に替って女御に添う。東宮と女御の難のような姿への感動が住吉明神の御蔭にまで思念を馳せる激しい感情を記し、ついで、世間の好評、東宮の親愛、そして競争者の身辺からの明石上へのさげすみ。以下の箇所を、作者は次のように記述する。

いどみ給へる御方々の人などは、この母君のかくて侍ひ給ふを、



暇に言ひなすれど、それに消たるべくもあらず。今めかしう、並びなきことをば、さらにも言はず、心にくくよしある御けはひを、はかなき事につけても、あらまほしうもてなし聞え給へれば、殿上人なども、珍しいいどみ所にて、とりどりに侍ふ人々も心をかけたる、女房の用意有様さへ、いみじく整へなし給へり。

源家と明石家の対戦の一齣という見地からすれば、この記述は、明石家の一方的勝利を語って余りある。以下その理由を述べよう。宮廷での明石女御の評判は、紫上が三日後に退いた後、紫上はここでは全く関わっていない。御方々が言う論法は、姫本人は最良、ただし付添の母親が、と言って回るが、暇どころではない。「今めかしう」と「並びなき」はこの姫の、紫上の養育による効能で、前者は紫上の都会的センス、後者はその身分であろう。これを「さらにも言はず」と言っておいて、「心にくくよしある御けはひ」、これは至る所に書かれている明石上の気質である。明石一族の気質として姫が受け継いだものである。しかも、これを、明石上は、後見人として、「はかなき事につけても、あらまほしうもてなし」て差し上げるのである。そして殿上人、即ち男子の評判もいい。女房集団も引き立つ、教養的にも物質的にも豊かさに満ちて。社交界をリードする明石母娘が目に見られるのではないか。

上もさるべき折節には参り給ふ。御仲らひあらまほしううちとけゆくに、さりとてさし過ぎもの馴れず、侮らはしかるべきもてなし、はた、つゆなく、あやしくあらまほしき人の有様心ばへなり。

明石上が紫上の委任を受けた、後見適格者であることを強調して、内の儀は終わる。

女三の宮物語は、重々しい構想をもってはじまる若菜上巻、続けてその展開の核心部分である若菜下巻、その冒頭に両巻合計量の約一割四分に当たる量で語り出される。あたかも交響曲第一楽章のように。それで、この第二部は、紫式部が想を新たにして書き出した部分だという印象が強くなっており、藤裏葉巻以前との断絶を、印象的に強く与えていることになる。そこで、果してそうかということを、客観的に両巻のページ数で、主題別に区分すると、次のようになる。全ページ二六五ページのうち

女三の宮物語（それに関わる紫上を含む）	一七九
明石一族の物語	四二
朧月夜物語	一四
玉鬘物語	一三
その他合計（いずれも源氏四十賀）	一七

となつて、全体の六割八分である。これだけの比率ならば一応は言えそうだが、この女三の宮物語の書き方は、宇治十帖が、橘姫巻から、全く想を新たに主題を展開し、光源氏生前の物語の余映はすっかり背景描写になつて、それ自身の独立した主題になつていないのとは違つて、ここに挙げた他の三物語は女三の宮物語とはほとんど関係の

ない物語の終結部分を正面から記述しているのである。

つまり、紫式部は、第二部において全く新しい主題を改めて展開したというよりは、以前の三物語の終結を書きながら、同時に一つの新しい主題を書きはじめた。ただしその主題は、大きなテーマで詳細に叙述することになって、分量的にも三分の二を占めるに至り、あたかも、第一部、第二部断絶の印象を与えた、ということになろうかと思う。これも私見であるが、女三の宮物語は何も新規の主題ではなく、娘の結婚問題に頭を痛める父親像、という、明石一族の物語に始まり、雲井雁物語、(明石姫物語)、玉鬘物語、近江君物語と続いて、作者の関心事だった、話題の系列上に着想された物語なのである。

女三の宮物語をこう見ることによって、なぜ若菜上・下巻で、他の三物語が、何とも厚かましく座を占めているのか、諒解がつく。

若菜上巻での明石一族の物語は、入内した姫君、今は桐壺の御方と称される彼女の懐妊の兆からはじまる。東宮の寵愛が深いので、やっとのことで六条院に退出したと書かれている。

姫宮のおはします殿の <sup>ひむがし</sup> 東面に御方はしつらひたり。明石の御方、

今は御身に添ひて出で入り給ふも、あらまほしき御宿世なりかし。

明石姫を養育した御殿がどこであったか、はっきりとは書かれていないが、玉鬘十帖での関連記事から、私は春の町の北の対であろうと推定している。しかし東宮女御になった今、里邸での処遇は、秋好中宮と同格、即ち、春の町の寝殿でなければならぬ。しかるに、ここは源氏の正夫人女三の宮の居処である。東西に二分して使用するほかな

かったのである。せめて養母紫上に近く、東面を。しかしそれ以上の理由に、女三の宮には西の対「一と二と二棟あつたらしい」が付属建物として確保されていなければならない。紫上は、寝殿におのが養女の場合を確保したことになるが、見方によっては、自分より高貴な二女性に住む寝殿に気押されざるを得ない。ここの引用個所に、続いて、「明石の御方、今は……」とあるのはまことに紫上に酷に書いている。女三の宮降嫁で気落ちした紫上に、明石姫の養母として完き付添が可能な。藤裏葉巻で、繰り返すようだが、光源氏が否定した。彼にしてみれば、紫上は手許に置いて可愛がりたいのである。宮中に付き切りでいるようなことはさせたくない。そう考えると、姫を養女にさせたというのは、どういう事だったのだろうか。続けて

対の上、こなたに渡りて、対面し給ふついでに、……

女三の宮に初対面となったが、それはともかく、紫上は養母なのに、姫が里下がりをした時に、面会しているようで、直前の明石上の六条院↑宮中、往復の甲斐々々しさと較ぶべくもない。そしてこの折、紫上は

宮よりも、明石の君の恥かしげにてまじらむを思せば、御髪すまし、ひきつくろひておはする、たぐひあらじと見え給へり。

この寝殿東面に現在住の桐壺の御方に、明石上が付き添っていると紫上は予想している。明石一族は遂に、春の町寝殿東面を、事実上、居住地として獲得したのである。この桐壺の御方との対面を、物語は意外な書き方でしているのである。

東宮の御方は、実の母君よりも、この御方をば睦まじきものに頼み  
聞え給へり。いとうつくしげにおとなびまさり給へるを、思ひ隔て  
ずかなしと見奉り給ふ。御物語などいとなつかしく聞えかはし給ひ  
て、……

やはりそうかと思わずにはいられないことが読みとれる。紫上が入内  
に付添って参内したのが昨年の四月二十余日、今は夏、一年余りが  
経っている。「さるべき折節には」参上したとあるが、実際はほとんど  
外出していないだろう。大そう愛らしく成長したのをとても可愛く  
思っているというのは、この時までほとんど対面していないからであ  
ろう。これはわかる。だが、姫は実の母親よりも紫上を「睦まじきも  
のに頼み聞」えるということわざをわざと記述しているのはなぜだろう  
か。私も現在まで正しい回答を思い付かないが、こういう風に考えら  
れるということでは、以前、蜷巻で継母の物語については十分な警戒  
を怠らなかつた、そのお蔭なのだという、いささか戯画的描写である  
こと。次にこれをもっと広く、紫上の子育ての成功をこの書き様で示  
していること。作者紫式部に生みの親より育ての親という経験があつ  
たこと。かように書いておかないと、現に私が読みとっているよう  
に、余りに一方的に紫上の敗北が、母親としても生じてしまうこと。  
等々考えられる。

年越えて、桐壺の御方は十三歳。この明石姫君出産のことは、これ  
を紫上の見地から、後藤祥子氏は、紫上の出家願望の厭世観は、明石  
問題、皇子出産のことが、そのような精神には重いとして、若菜上・

下巻の記述を解かれており、この指摘は的確で同意できる。<sup>註</sup>その一  
つがこの個所である。

……二月ばかりより、あやしく御気色かはりて悩み給ふに、御心ど  
も騒ぐべし。陰陽師どもも、所をかへて慎み給ふべく申しければ、  
外<sup>ほか</sup>のさし離れたらむはおぼつかなしとて、かの明石の御町の中  
の対に渡し奉り給ふ。こなたはただ大きな対二つ、廊どもなむ廻り  
てありけるに、御修法の壇ひまなく塗りて、いみじき験者ども集ひ  
てのしる。母君、この時にわが御宿世も見ゆべきわざなめれば、  
いみじき心を尽くし給ふ。

この皇嗣が誕生するかどうかという、源氏にとっても、はたまた明石  
一族にとっても、最も重要な瞬間が、その里邸として、血縁の明石の  
町を選んだということは、春の町には適当な対がないというわけでな  
い。選べば養母紫上の居住する東の対だっていい。むしろ紫上をして  
決定的な役割を演じさせるのならここが最適の里邸である。しか  
し、陰陽師どもも、所をかえよと進言する。つまり春の町は不可と  
言っているわけで、源氏が決定したように、明石の町を暗示したので  
ある。それは出産だからである。血縁の母系の故郷でこそ安産が保  
証される。これくらい決定的な宿世はない。明石家の源家に対する決  
定的な勝利は目前に迫っている。それは、源家ではもうなく、紫上を  
孤立に追いやって、の勝利なのである。

母君、明石上の宿世が今見られる、と物語は書いて、続けて尼君が  
登場する。既述したように、尼君が登場するのは、明石一族の宿世を

語る意図を作者が持っている時である。この母君は女御の傍に付添っていても、昔の事などは語らない。しかし、女御が明石の町に住めば、尼君と切離すわけにはゆかない。女御が血縁の故郷に住むことは、自らの因縁を祖母なる家の語り部から聞かされることであつた。

この構成は、明石一族の物語の特徴的構造の表現でもある。既述のように、この物語は、その最初の時点ですでに全体の構想は出来上がっていた。それだけでなく、どの話題をどこで書くかということまで予定されていたと思う。そして、これを宿世という糸で、その宿世の具現者である姫君がすべてを後程聞き知ること、即ち聞き知るという構造化を行うことで、物語が完結する訳である。かつての明石巻での一つ一つの具体的事実をまず尼君が姫君に伝えることで、これを子孫に伝えるという永遠性を獲得する。明石家の強さは、ただに血縁の強さだけではない、富力の強さだけではない、住吉信心の強さだけではない。語りの強さでもある。物語たる所以である。

これを聞かされた姫は、自らの出生と育ちとを知って、自分のあるべき姿を自覚する。

ものあわれにながめている時、明石上が来て、尼君が姫に古代のひが子どもを語るのを咎める。明石上はこういう出自の卑しかったことは、「今はかばかりと御位を極め給はむ世に、聞え知らせ」ように思っていた。それはうっかり知って「心劣り」するといけないと思つたからだ。だが女三代の共鳴は、そんなこだわりを消失させる。出産前の結びが三女性の唱和で終わっているのは、明石家の栄光が内部充

実でさらに輝く土台になっている。

「三月十余日のほどに、平らかに生まれ給ひぬ。」ではじまる皇子出産で、この出産という生命的事象が明石の町で実現したことの意義は大きい。この出産をめぐるのは、源家と明石家は次のような関係になっている。

こなたは隠れの方にて、ただ気近き程なるに、いかめしき御産養などのうちしきり、響きよそほしき有様、げにかひある浦と尼君のためには見えたれど、儀式なきやうなれば、渡り給ひなむとす。対の上も渡り給へり。白き御装束し給ひて、人の親めきて若宮をつと抱きぬ給へるさまいとをかし。みづからかかる事知り給はず、人の上にも見慣らひ給はねば、いとめづらかにうつくし、と思ひ聞え給へり。むつかしげにおはする程を、絶えず抱きとり給へば、まことの祖母君は、ただまかせ奉りて、御湯殿のあつかひなどを仕うまつり給ふ。東宮の宣旨なる典侍ぞ仕うまつる。御迎湯むかへゆにおり立ち給へるもいとあはれに、内々のこともほの知りたるに、すこしかたはならばいとほしからましを、あさましく気高く、げにかかる契りにとにものし給ひける人かなと見聞こゆ。この程の儀式などもまねびたてむに、いとさらにや。六日といふに、例の殿おとどに渡り給ひぬ。出産という原始以来の生命維持の根源の営みは実家で、つまりここでは「隠れの方にて」行うことが慣習に叶っており、またそれが出生の皇子の将来を保証することになる。ここの引用文は誰がどこへ渡ったのか、はっきりしない書き様だけれども、出生から五日までは明石の

町で、六日目からは、公式の産養の儀を行うために、春の町の寝殿でということになるうか。明石の町で、三・五兩日の産養は誰がしたか書いてないが、光源氏と紫上ではなかったか。それが尼君には光榮なのだが、ここで産養をしてみても、どうも六条院出身の皇嗣の産養にはふさわしくないで、源氏の判断で、急遽移居することになったのだろう。「儀式なきやうなれば、渡り給ひなむとす。」は、「六日といふに例の大殿に渡り給へり。」以下は遑って、出産直後のことということになる。

ここでは養母紫上が主役で、実母明石上は、迎湯の主役、東宮の宣旨の典侍よりさらに下の格で「御迎湯におり立ち給へるも」とあり、その視点を典侍の目において、「いとあはれに」と記し、続けて、この段の中核の描写の、彼女に欠点があるのだったら、気の毒に、だから介添役でしかないのだ、という当然の感情、典侍という役から下に見られるのだが、典侍には、「あさましく気高く」とあり、はっきり言ってしまうえば、紫上と比べて、どちらが皇男子の祖母君なのかかわからない、という程度の感慨であろう。紫上が「人の親めきて若宮をつと抱き居給へるさまいとをかし」と、単に家庭夫人的に書かれているのに対して、まことに対照的である。公式になればなる程、紫上は奉られる。しかしもはやここでは、皇男子祖母としての風格自体、明石上に移ってしまったのである。

産養も終わって、皇子はすくすくと成長する。その様子を見届けつつある紫上と明石上の二人の間柄を、世人は好奇の目をもって見よう

とするが、このことを物語は次のように書く。

御方の御心おきての、らうらうしく気高くおほかなるものの、さるべき方には卑下して、憎らかにもうけばらぬなどをほめぬ人なし。対の上は、まほならねど、見えかはし給ひて、さばかり許しなく思したりしかど、今は宮の御徳にいと睦まじくやむごとなく思しなりなり。児うつくしみし給ふ御心にて、天児など、御手づから作りそそくりおはするもいと若々し。明け暮れ、この御かしづきにて過ぐし給ふ。

紫上が明石上を今は睦まじく思うようになった、ということは、この文脈では、明石上が、内側の気高さと外側の卑下とを、巧みに使い分けたことにより、世間の評判の高さを得つつあるからだ。この明石上の存在を、睦まじく思うという形で承認する以外に、紫上自身が六条院で評価を得続ける方法はない。形式においては、わざと卑下する迎湯役のように、わざわざ己れを低める。しかしそれが逆に、気高さを目立たさせ、おどかさという包容力の証拠になる。

一方紫上は、この明石上の成長に対して殆ど進歩しない幼さを持ち続けている。「児うつくしみし給ふ御心」はよくもとれるが悪くもとれる。「いと若々し」はあまり褒め言葉に感じられない。明石姫の入内によって、もう養母として本気で相手にされなくなったので、次は孫を可愛がっている。とすれば紫上にとって気の毒すぎる程である。

次に話題は、この事を伝え聞いた明石入道が、山に籠る決意をして、送って来た最後の消息をめぐる話題である。本稿の中心主題から

すれば、入道の文は大して問題ではない。ただ関わりのあるいくつかの注意点を挙げると、作者が地の文でも、また文の中でも、近ごろは入道の側から京にはほとんど人も通わなかった、と書くのは、推測すると、明石からの直接の富の運送はもう必要なく、京で自発的に出来たのではないか、ということである。次に、明石一族の宿世の最終根源は、この入道の執念だということである。前に、尼君にそのような役割を与えて私は記述したが、その一層の根源は入道にある。それがこの願文と文とである。そしてこの願文の趣旨をはたすことを、姫君が国母となった時点と指定していることである。そして最後に一つ、この文にも地の文にも書かれていないことで大事なことは、入道は、紫上のこと、即ち姫が養女になったことに全く触れていないことである。入道とても当然聞き知っているはずである。しかし、その二月のその夜の霊夢に発する明石一族の宿世実現には、紫上は全く無用の女性なのである。霊夢と住吉明神と己れと娘と尼と、これが明石一族のすべてである。そして姫と今誕生の皇子と。紫上が養育したことなど、何の意味もないのである。

この入道の文等一式を受け取った尼君は、この時、南の御殿で女御に付添っていた娘に来るよう呼ぶ。この母娘の対話は、それ自身としては母娘の愛情、そして話題として語る入道と尼君との過去の夫婦愛であって、本稿の主題の表現としては、この一文だけであろう。

よろづのこと、さるべき人の御ためとこそおぼえ侍れ。

即ち、明石一族の宿縁は、この夢を見、夢を信じた、父入道のために

ある。こう明石上は、父入道に絶対の信頼を寄せている。

もう全く実力では紫上を圧倒した明石一族は、おのが宿世の現実的な確認へと行動に移す。その機会は今である。それは、東宮が入内を催促しているからである。

宮よりとく参り給ふべきよしのみあれば、「かく思したる、ことわりなり。めづらしき事さへ添ひて、いかに心もとなく思さるらむ」と、紫上も宣ひて、若宮忍びて参らせ奉らむ御心づかひし給ふ。御息所は、御暇の心やすからぬに懲り給ひて、かかるついでにしばしあらまほしく思したり。程なき御身に、さる恐ろしきことをし給へれば、少し面瘦せ細りて、いみじくなまめかしき御さまし給へり。「かくためらひ難くおはする程、つくろひ給ひてこそは」など、御方などは心苦しがり聞え給ふを、大殿は、「かやうに面瘦せて見え奉り給はむも、なかなかあはれなるべきわざなり」など宣ふ。

ここは三人の対応の違いが出ていておもしろい所だが、本稿の主題に即して取出せるのはこういう点であろう。紫上の意向を意識して、場合によってはこの四人同席の場で、明石上は、はっきりと紫上の意向に反対したのである。今この場を再現してみよう。東宮から女御が参内するように使者が来た。その伝言は、四人同席の場に伝えられた。真先に紫上が反応して―「紫上も」は東宮に同意したという「も」である。若宮の方を優先して準備する。女御の意向も確かめないで、若宮に関心を持っているのは、軽率というか、幼稚というか、紫上の軽さの一面が出ている。ところが肝心の御息所が、あたしもう少しこ

にいたいと、養母に逆らったのに違いない。ここで作者が、女御とは書かず、御息所と書いているのは、もう紫上の言う事など聴いていない、つまり母になった女御の、母としての女の強さを強調したかったのであろう。子を生んだことのない紫上は女房たちのいる前で恥をかいたわけである。この女御を後押しして御方が、本文のように言って女御の肩を持つ。明石上は、その実の母娘の紐帯を發揮してかように強くなったのである。しかも「御方などは」とは何だろう。付添の女房たちは、明石上に同調したのである。居合わせた源氏は大そう困惑したに違いない。面瘦せているのもいいものだよ、と理由にもならぬことを言って、紫上の体面を立てたのである。ここに「など宣ふ」と作者が書いているのはごまかし発言の証拠である。

これは、はじめて、紫上と明石上とが、その母親の面目をかけて対決した場面である。軍配はもちろん、源氏によって紫上に挙げた。しかしそれは、本人および女房多数の意見を抑えてである。このあたりからの課題は、決定的に優位に立った明石一族が、どう源家―源氏と紫上―を抑え込むかである。ここではそれは、明石女御が養母紫上へ叛旗を翻すという形で始まった。

対の上などの渡り給ひぬる夕つ方、しめやかなるに、御方、御前に参り給ひて、この文箱聞え知らせ給ふ。

「対の上など」とあるから、源氏も一緒に、であろうか。近々参内はきまった。その僅かな隙に、明石上は娘女御に宿世を語るだけでなく、また「御覽ぜよ」だけでなく、

この願文は、近き御厨子などに置かせ給ひて、必ずさるべからむ折に御覽じて、このうちの事どもはせさせ給へ。疎き人にはな漏らさせ給ひそ。

今や明石家の主人となった女御の手許に保管するよう命ずるのであった。伝来が的確に行われた。明石家累代の宝物となるに違いない。この「疎き人」に紫上が含まれているかどうか。そして、明石上の教訓が続く。有名な

対の上の御心、おろかに思ひ聞こえさせ給ふな。いと有難く物し給ふ深き御気色を見侍れば、身にはこよなくまさりて、長き御世にもあらなむ、とぞ思ひ侍る。もとより、御身に添ひ聞えさせむにつけても、つつましき身の程に侍れば、譲り聞えそめ侍りにしを、いとかうしものし給はじとなむ、年頃は、なほ世の常に思ふ給へ渡り侍りつる。

この前に、紫上の意向に反撥した娘を訓すのに、対の上の恩恵を説くというのはよくわかる。現代風に言えば、「あのおばさまの御心をい加減に考えてはいけませんよ」ぐらいの口調になろうか。「あの旦那様の御信望の厚い方だから、どんな目に合うかわかりませんからね」というのが真意だろうか。この後、だから私より長生きしてほしい、はいかにもとって付けた感じがするし、そんなに大事にしてくれないだろうと、世間並の、継母ぶり実行かと思っていたのですがね、は、消極的に被害者にならなかったという理由が、おろかに思うことの禁止の根拠になっているのはまたいかにも、苦しい理由であ

る。

退出したと思った光源氏の方は隣室の女三の宮の所にいた。障子をあけて、この母子のいる所に加わる。若宮は対の上の所にいつてい。入道の文箱がそこにあるのを今さら隠すわけにはゆかず、そのままにしておく、源氏はそれに気が付く。明石上はこれが入道のものであることを語るが、それは隠しておくのも「わづらはし」いからであつた。

「かの明石の岩屋より、忍びて侍<sup>はべ</sup>し御祈<sup>いのり</sup>の巻<sup>くわんじゅ</sup>数、また、まだしき願などの侍りけるを、御心にも知らせ奉るべき折あらば、御覧じおくべくやとて侍るを、ただ今はついでなくて、何かは開けさせ給はむ」

と、先程読者に披露し、女御にも読ませた、文箱の中を、明石上は源氏が見るのを断る。まだその願の実現していないことがある、というのがその理由である。ともかくこれは、明石上は、これは明石家の秘事であつて、たとい光源氏といえども、その宿世の実現過程に参入することは承認出来ない、咄嗟に思ったのであろう。

源氏は話を聞いて、入道とその妻の尼君の夫婦別れの宿縁に同情する。そして涙ぐむ。その源氏の態度に明石上も警戒心が薄らいだのか、「この夢語も思ひ合はすることや、と思ひて」これを見せた。読者はこの霊夢に思ひ合わせる事が、濔標巻で、源氏に宿曜が勘申した予言であることを知っている。また、この「夢のわたりに目とどめ」た源氏は、宿世の予告が、自分への一方的な告知ではなく、向い側の

明石入道に、さらに強力な表現で、それ以前にすでに存在していたのを知らされることになった。もちろん、源氏はそんなこと、濔標巻の予言を、明石上に語るはずはない。しかし明石上は、うすうす感付いていたのではないか。「思ひ合はすることや」と思つて、源氏様も、この私の娘が中宮に立つという夢語などを御覧になりませんでしたか？、とたずねた。即ち

「いとあやしき梵字とかいふやうなる跡に侍めれど、御覧じとどむべきふしもやまじり侍るとてなむ。今はとて、別れ侍りにしかど、なほこそあはれは残り侍るものなりけれ」とて、さまよくうち泣き給ふ。

ここには明石上の演技がある。彼女はふと思ひ直して、光源氏に、自分達一族の裏保証をさせたかったのである。それが「御覧じとどむべきふし」である。しかしこう言っておいて、別れのあはれを言つて、泣いてみせたのである。

源氏はどこまで明石上に言うべきか？ 明石一族の先祖の大臣の不運と、その女系の繁昌を言い、後者は入道の行いの験だという。しかし、以下は心中の思ひである。

あやしく、ひがひがしく、すずろに高き志ありと人も咎め、また我ながらも、さるまじきふるまひを仮<sup>かり</sup>にてもするかな、と思ひわたりつれ。さらば、かかる頼みありて、あながちには望みしなりけり。横さまにいみじき目を見、漂ひしも、この人ひとりの為にこそありけれ。いかなる願をか心に起こしけむ、とゆかしければ、心の中に



拝みて取り給ひつ。

とあるから、これは他言出来ることではなかった。入道をあしざまに思ったり、受領風情の女にひっかかった、など、あの時には思ったが、そのさらに根源のことは、今日まで知らなかった。結局、この女御のために私はさすらったのだ、と、思いのすべてが明らかになった今、源氏は、自分さえも明石一族の呪縛の中に居ることを思い知らされたことであろう。逆に言えば、明石一族との関わりなしでは自分の出世もなかった、との思いである。落標巻の予言が叶ったのではなく、その予言自体が入道の霊夢を根拠としてはじめて成り立っているということを知ったのである。明石上の思惑は、それとは無関係に、源氏自身に自己の主体性を疑わせる働きをした。源氏は、かくも整然とした入道の願立てに対抗心を燃やす。

「これはまた具して奉るべきもの侍り。今また、聞えしらせ侍らむ。」

と女御に言うのが精一杯であつたろう。第一そんな「もの」があるのだろうか。落標巻の宿曜の勘申を披露することなどあり得ない。須磨の絵日記のようにも思われるが、これはすでに絵合巻に、

「かの浦々の巻は中宮（藤壺）に侍はせ給へ」と聞えさせ給ひければ、

とあるので、明石一族に伝えられることはない。絵日記は当然、中宮↓冷泉帝であろう。平凡に当ててみれば、明石巻で、嵐の最中、源氏が住吉明神にかけた大願の文書およびその願解きが行われた落標巻で

社頭に捧げた記録物などであろう。

むしろ源氏は必死になって、紫上をかばうことによって自分の權威を保とうとする。

そのついでに、「今は、かくいにしへの事をもたどり知り給ひぬれど、あなたの御心ばへをおろかに思しなすな。……」

これは、女御が明石女系直系の宿世を知り、それが今日ある由縁だと知ることが、紫上輕視を招く怖れを源氏は警告した、という以上に、もう源氏としては、その実体の空しさに言葉で対抗し、自分の權威を、紫上が養母だったことを思い起こさせることによってしか護れないことを知ったのであろう。霊夢があつたことは、もう、身分が卑しいという事自体を問題でなくしてしまう。女御を紫上の養女にして内に備えたというのは、宿世でも何でもない。自分源氏が、紫上をいとおしんでいるから、明石一族を抑制するためだから、発案したことに過ぎない。紫上がいよいよとまいと、宿世は実現する。入道の願文にも文にも、紫上への尊敬や感謝は、何一つ書かれていない。源氏は女御が紫上を敬すべきことを、継母として最良な人であることを、諄々と説く。しかしどこまで女御に翻意を求められるだろうか。

続いて源氏は母親に矛先を向ける。ここが例の有名な、「その御為には何の志かはあらむ」という源氏の冷酷な言葉がある、と言われている個所であるが、実は、必ずしもそう取らなくていいかもしれない。源氏はまずこう切り出す。

「そこにこそ、少しものの心得てものし給ふめるを、いとよし。睦

びかはして、この御後見をも同じ心にてものし給へ」

言い方が「少し」とあるところから非情であるのは当然だが、それ以上この言い方は、女御に比べてまだいい、の意味ではないだろうか。そして源氏は、二人対等に面倒を見るように、というような言い振りをする。こう言いかけられた時、明石上はいつももある一定の返答の型をとる。

「宣はせねど、いと有難き御気色を見奉るまに、明け暮れの言ぐさに聞え侍る。めざましきものになど思し許さざらむに、かうまで御覧じ知るべきにもあらぬを、かたはらいたきまで数まへ宣はすれば、かへりてはまばゆくさへなむ。数ならぬ身のさすがに消えぬは、世の聞き耳もいと苦しくつつましく思ひ給へらるるを、罪なきさまに、もて隠され奉りつつのみこそ」

それは、相手の意向を自分勝手に忖度して、ただ自分が卑下すればそれで良いとする返答である。ここもそうで、「いと有難き御気色」「数まへ宣はす」というのは、紫上が本当にそうなのかとは無関係なことなのである。それを慎重に「宣はせねど」と、括弧付きで言っているわけである。私見であるが、源氏はこういう明石上の言い回しが気に入らないのであろう。なぜそうかという点、結局この言い方だと、対の上は、実母である私の面倒を見るべきなのだ、そしてそのようにして下さっています、という感謝（表面的な）ということになってしまいうだろからである。

これに対して源氏が、

「その御ためには何の心ざしかはあらむ。ただ、この御有様を、うち添ひてもえ見奉らぬおぼつかなきに、譲り聞えらるるなめり。それも、また、とりもちて掲<sup>けちえん</sup>焉になどあらぬ御もてなしどもに、よろづのことなのめに目やすくなれば、いとなむ思ひなくうれしき。……」

例の有名な言葉は、もちろん明石上に釘をさしておく言葉ととれる。その解釈はかつて私もとってきた。けれどもこの引用全部から、そういう源氏の強圧という形で紫上を立てるものだから、源氏が彼女そんな気はないので、もっとあなたはクールな感情でいい、ただあなたが、自分は強い立場だという態度をとっていないから、私はとても安心出来てうれしい、と、それなりに明石上に感謝していると取る方がすなおかもしれない。つまり、もう光源氏は、明石上の宿世は、家系はもとより、人格・教養でも、紫上の下位に実質的に甘んじさせておくことが出来なくなった。今となつては、紫上の体面を立ててくれさえすれば十分だと思っているともとれるのである。

光源氏が対へ帰った後、独り言を言う明石上は、「さも、いとやむごとなき御心ざしのみまさるめるかな。」と始め、それも人柄からして当然、女三の宮はうわべだけ、そして「わが宿世はいとたくぞおぼえ給ひける。」光源氏をめぐる競争で、この三者は、紫上―心ざし、女三の宮―おぼえ、自分―宿世。女三の宮は問題にならない。紫上は御心ばえのみがまさる。源氏が圧迫される紫上をかばっている実体を

まことによく見抜いている。もうすべてが明石一族に帰するのは目前である。

もう一つここで、明石上が「数ならぬ身のさすがに消えぬは」と言っていることに注目したい。これは前に、女御に明石上が「身にはこよなくまさりて、長き御世にもあらなむ」と言った言葉と重複している。明石上は、この時点で、最後の決め手は、紫上と自分と、どちらが長生きするか、という長寿競争であることを見抜いている。もし自分が先に死ねば、養母紫上は実母代りになる。もし紫上が先に死ねば、問題自体が消滅する。これは若菜下巻での女葉の後、紫上の発病によって、最後の勝敗は決し、もう明石上はこういう言葉を口にすることは出来なく、また必要もなくなったのである。彼女の勝利感はある。

やむごとなきだに思すさまにもあらざる世に、まして、立ちまじるべきおぼえにしあらねば、すべて、今は恨めしき節ふしもなし。ただ、かの絶え籠りにたる山住みを思ひやるのみぞあはれにおぼつかなき。尼君も、ただ福地の園に種まきて、とやうなりし一言をうち頼みて、後の世を思ひやりつつながめ給へり。

遥かに若紫巻・須磨巻で、この親子三人がどれだけ一つ心になっていたことか。特に娘は心から父の悲願をわが身に引受けたか。家族の心である。

五年が経過した。光源氏四一歳の時から、今は四六歳、帝は在位十八年で退位。東宮即位。明石女御の第一皇子が立坊。紫上の出家希望、

彼女ももう三八歳である。明石一家は、女御は「ただこなたを、まことの御親にもてなし聞え」て、実母は隠れ処の後見人として卑下しているのが将来も安定。尼君は喜びの涙。

そこへ住吉詣が行われる。<sup>キ</sup>

住吉の御願かつが果し給はむとて、東宮の女御の御祈りに詣で給はむとて、……

とあるのは、入道の御願は即女御の御祈りであり、これは父親である自分がすべきこと、こうまず思ったのである。ところがこの箱を開けてみると、そこに書いてあることは、女御が国母となるはずの、まだ先のことであった。それで、「このたびは、この心をばあらはし給はず、」ただ源氏の物詣という形ですることになった。この物詣には対の上を具し、車は、(一)女御と対の上で一輛、(二)明石上・尼君・女御の乳母で一輛。そして作者がこの住吉詣の主役を尼君にしているのは、この住吉詣を、明石一族のそれとした場合、願文に照らして時期尚早、またそれなら源氏がとりしきるいわれはないことになる。そこでこれは、「ただ院の物詣にて」ということになる。そうであれば、実質的には、入道の願果たしという趣旨で実行するとなると、活躍の主役は、入道の心を心として今に生きる尼君であり、これならば、すべてに安定的である。紫式部が、この源氏再度の住吉詣を、どんな性格のものにしようかと思案したに違いないことは、この引用の一句でわかる。儀式典礼を身につけた女房なればこそである。

こうすれば、源氏のリーダーシップで、紫上を同行出来る。紫上は、

住吉明神とは何の関係もない女性である。彼女の本地は賀茂である。その彼女が明石姫君を養女にするということは、姫が賀茂の氏子になってここに参詣し、一方、住吉とは絶縁することではなければならない。養母だからという理由で紫上は住吉に参することは出来ないのである。ここを極めてはつきり書いている。

浦伝ひのものが騒がしかりし程、そこらの御願ども、みな果し尽し給へれども、なほ世の中にかくおはしまして、かかるいろいろの栄えを見給ふにつけても、神の御助けは忘れがたくて、対の上も具し聞えさせ給ひて、詣でさせ給ふ。

今回の参詣の理由付けは、源氏個人の不遇時代の御願はすでに濡標巻で果してあるが、さらに栄えを重ねたのは源家への助力なので、紫上同道で参詣する、というのである。紫式部自身、歪められた理由付けだと思つて書いているのだから、明石上を抑えて紫上をせり出させる論理はこれしかない。端的に繰返せば、住吉明神は源家の栄えを計つて下さったので、紫上同道で詣でる、ということである。

それでは、明石一族はどう関わらせればいいのか。濡標巻では、源氏個人の御願果しであるから、明石一行は、遠くから別行動で偶然目撃するという構想にした。今度も源氏の御願である、として明石一族を排除出来るだろうか。もとより不可能である。それでは参加のさせ方は。明石女御を養女として紫上と同格にする。明石上に活躍の場を与えない。尼君を一族の代表として、既往の明石巻の懐古の主役とし、明石上を懐古の主役とはしない。これを次のようなやりとり

の中で、明石上を表に出さないで済ました技法はみごとである。源氏は尼君を引立てた、明石上は反対した。尼君は娘の意見に従わず、源氏の誘いに乗った。明石上は、なぜ源氏が尼君を連れてゆくとしたのか、その真意が理解出来なかったか、もしくは理解出来たが故に、女御が国母になった時に尼君も考えたのか、どちらかであろう。

「尼君をば、同じくは、老の波の皺のぶばかりに人めかしくて詣でさせむ」と、院は宣ひけれど、「このたびは、かく大方の響に立ちまじらむもかたはらいたし。もし思ふやうならむ世の中を待ちいでたらば」と、御方は静め給ひけるを、残りの命うしろめたくて、かつがつ物ゆかしがりて、慕ひ参り給ふなりけり。

明石上が表立って登場して来ず、作者から不利な扱いをされているのは、明石上の影が薄くなっているからではなく、まともに登場させれば、彼女こそが中心人物になってしまう、紫上が滑稽化され、殿の物語が台無しになる。その位、明石上の立場が強いからだと思う。光源氏が、作者紫式部の筆遣いまで借りて明石一族を抑えようとする試みが表面的には成功して、この長い長い明石一族の物語は、

世の言ぐさにて、明石の尼君とぞ、幸ひ人に言ひける。

明石の尼君の登場の終結は、明石一族の物語の終結でもある。思えば、明石一族の始祖は、入道も尼君も、若菜下巻、光源氏四六歳に至るまで、二九年間、源氏物語の中で現実の生命を持っている人間として描かれている。「宿世たけく」は両親の、曾孫を見届けた寿命の長さの形容でもあった。

付記 わざと私は「付記」として書くのだが、明石入道の願ははたして果されたであろうか。若菜下巻の住吉詣も、入道の願果しでなかった理由は、女御がまだ国母「思ふやうならむ世の中」になっていない、つまり、第一皇子は東宮で、まだ即位していないということであった。それではこの願は果されたであろうか。源氏物語は最末の巻夢浮橋でも、明石姫を中宮のままにしている。願はまだ果されていないのである。紫上への作者紫式部のいとしみ、彼女が遂に決定的に敗北しないで済んだと、かようにみなすのは、深読みに過ぎるだろうか。

注1 小山利彦 賀茂神の信仰 『源氏物語』との関連を軸に 風俗七二号

注2 鈴木宏昌 源氏物語と賀茂信仰—王権を守護するもの— 大東学園専門学校紀要 第1号 昭和六〇年三月三十一日

注3 高崎正秀 同著作集第六巻『源氏物語論』所収「源氏物語の『水の女』」「源氏物語の成立—紫の物語をめぐって—」

注4 服部直人 『源氏物語論究』所収「紫の上」 高山書院 昭和二二年八月

注5 高橋和夫 源氏物語に見られる邸宅とその伝領について——二条院と六条院—— 風俗第七九号 昭和五九年六月

注6 後藤祥子 「若菜」以後の紫の上「源氏物語の史的空間」所収 東京大学出版会 昭和六一年二月

注7 後藤祥子 住吉社頭の霜 「注6」所収 住吉詣の歴史的展開事情について詳細に跡付け、その意義を解明した、注6の論文と共に、出色の論文である。

（原稿受理 昭和六十一年九月十三日）